

資料

遊びを取り入れた保育研修に関する一考察

田中卓也¹⁾・井上裕美子²⁾

The consideration of learning of nursery(child care)seminar in the contents of child's play(activities)

TANAKA Takuya INOUE Yumiko

概要

本研究は代表執筆者が実際に行ったN県の公立保育所で行った事例を取り上げながら、研修の内容および特徴を明らかにするものである。なお「研修」は講義以上に遊びをとり入れた内容の実践形式のものを重視しながら行っている。遊びを取り入れた研修の実施により、園長、主任から新人保育者。若手保育者にいたるまで、円滑な人間関係を構築できるだけでなく、研修後に自園の保育に活気づけることができるようになることが明らかになった。

Abstract

The purpose of this study is to clarify in the contents and the features of the nursery (child care) seminar in the contents of child's play(activities) in public nursery school of Nara prefecture. In their nursery (child care)seminar, nursery teachers in youth days were more developments, nursery teachers development seemed to improve the understanding of young children and how to support them,plus communication and teamwork were promoted through collaboration with colleagues.

Keywords : nursery seminar, the director of nursery school, nursery school teachers, child's play, communication, teachers development

I .はじめに—本研究の目的と先行研究の検討—

2008(平成20)年に「保育所保育指針」が改訂されて以来、保育園では園内研修のあり方をめぐって模索・検討を行う時期が継続している。

保育所保育指針の第7章には「職員の資質向上」が明記されている。そこでは研修の重要性が述べられており、「保育所は、質の高い保育を展開するため、絶えず、一人一人の職員についての資質向上及び職員全体の専門性の向上を図るよう努めなければならない」

とある。すなわち保育の質の向上はもちろんこと、保育者個々の専門性の向上においても、各保育園において自主的に園内研修を実施していくことが述べられている。

しかし保育園における保育士らの職務は、大変多忙を極めており、各園がそれぞれ計画的な園内研修を行うことは、容易ではない。また職員の勤務時間については、シフト体制が採用されており、園の全職員が一堂に会して研修を行うことは基本的に難しいといえる。残業してまで研修は行われないことから、限られた時間内での研修になることは必至で

1) 静岡産業大学経営学部
〒438-0043静岡県磐田市大原1572-1

2) せいがの森こども園
〒192-0363東京都八王子市別所1-73

1) School of Management, Shizuoka Sangyo University
1572-1 Owara, Iwata, Shizuoka, 438-0043, Japan.

2) Center Seiganomori,
1-73, Bessho, Hachioji, Tokyo, 192-0363, Japan

ある。代表執筆者が行ったN県の私立保育園では、職員構成が非正規の職員が正規職員の数を超えている事情である。園全体で保育を考えるには、正規のみならず非正規の職員にも一緒に研修に参加することが重要視されることになる¹⁾。

しかし園長や主任等が、非正規の職員にまで研修への参加を呼びかけるのは、大抵の場合遠慮がちになる。それ以外にも様々な要因が重なって、園内研修の運営に困難を感じている保育園が存在している。村上博文は、「保育園における園内研修の実際と課題—静岡県内の調査より—」(『常葉大学保育学部紀要』第2号、2015年)の研究を通して、実態調査およびアクションリサーチ研究を積極的に実施し、各園の園長から園内研修を積極的に進めていきたいという意見が聞かれるのとは反対に、具体的な運営面(時間や方法など)において困難を感じていることが改めて明らかにされている。またアクションリサーチ的研究では、関東周辺の私立保育園を対象に、映像やエピソード、写真等のメディアを使った研修をサポートしながら、各園にて自らの保育を振り返り、直面している課題をテーマに同僚と話し合うことで解決の糸口を見つめることが、若手保育者の専門性向上につながるかと論じている²⁾。

さらに、一人ひとりの保育者が自分のクラスだけでなく、他のクラスに対して今まで以上に関心を寄せるようになり、また語り合うようになった、と保育者から報告がなされている³⁾。

また園内研修の研究に関しては、秋田喜代美・松山益代『参加型園内研修のすすめ—学び合いの「場づくり」—』(ぎょうせい、2011年)、中坪史典編『保育を語り合う「協働型」園内研修のすすめ—組織の活性化と専門性の向上に向けて—』(中央法規出版、2018年)、同編『質的アプローチで拓く「協働型」園内研修をデザインする—保育者が育ちあうツールとしてのKJ法とTEM—』(ミネルヴァ書房、2018年)、伊勢慎・中坪史典・境愛一郎・保木井啓史・濱名潔「KJ法を用いた園内研修において保育者はどのような振

る舞いをしているのか」(『幼年教育年報』第38巻、2016年)、森上史朗「カンファレンスによって保育をひらく」(『発達』第68巻、ミネルヴァ書房、1996年)、松本信吾・中坪史典らによる広島大学附属幼稚園における保育カンファレンスに関する一連の研究などが存在する。これは保育場면을撮影した動画を視聴し、保育者同士で子どもの活動状況の基準をもとに議論するものである。松本・中坪らの試みも、研修が保育者の専門性を高めるうえで重要な役割を果たすことを裏付けている。

このように園内研修の有効性については、保育園における実態調査や実際に園内研修にかかわるアクションリサーチ的研究から明らかになりつつある。

本研究では、「遊び」を取り入れた園内研修の視点から、若手保育士らがどのように学びにつなげているのか、について見いだすことが目的である。

園内研修の困難と同時に充実が叫ばれている今日、各園の研修がより有意義なものになるための方策を考える。

Ⅱ. 遊びの重要性

子どもにとって「遊び」が成長の場であり、心身の発達を促すといわれている。保育者が子どもに遊びを促すのではなく、子ども自身が自ら動き出すことが大切であり、自ら遊びだすことにより、満足感や達成感を感じるようになる。そして子どもは繰り返し遊びを通じて楽しさを見つけていくのである。

その際保育者は、子どもの姿をどのように捉えることが必要なのか。子ども一人ひとりが遊びに一生懸命になり、まわりの仲間たちとともに遊ぶことができる保育であること、次に子どもたちがその遊びについて、意欲的に遊ぶことができるものになっているかといった保育者の配慮がみられるか、が大切になる。保育所の職員の多くは大学や短期大学を卒業した20代の保育士が多く、保育所に就職してからも日は浅く、実習前のボランティアなどは経験しているが、さまざまな保育経験もそれほどたくさんあるわけではない。

そのため若手保育士を対象とした「遊び」

をテーマとした研修を求められることになった。園長の話によれば、遊びについても、それほどたくさんレパートリーがあるわけではなく、つねに「この年代の子どもたちには、どのような遊びがふさわしいのか」とか「どんな遊びをしたらいいのか」といった疑問の声を聴くと述べていた。「遊びを通じて自らの保育を考えることができる保育士」になることを園長は常々、若手保育士の保育の取り組みを見ながら感じているのだという。

Ⅲ. 遊びを通した園内研修

保育士らは「遊ぶ子どもの姿」を実際に観察することで、職員間の共通理解が重要となる。保育士がそれぞれ意見を出し合い、日々の保育のなかで、生き生きとした子どもになっているかがポイントになる。

小川博久、岩田遵子らは「遊び環境の大切さ」というテーマで園内研修を行っている。

遊びの環境を整備することで、子どもが落ち着き遊べる空間（居場所）ができ、子どもたちは遊びが広がり、自分の世界を作り出すことができるようになり、他の子どもたちともかかわることができるようになる。そして遊びが広がり発展する、というものである。

すなわち子どもらは友達とイメージを共有し、友達とつながりながら、遊びを深めていく環境づくりが、保育士にも重要であることがわかる。

代表執筆者が園内研修を行ったN県のN保育所は、N県とO府の県境にある、S山の山麓にある小さな保育所であり、正規職員6名、非常勤職員が20名ほどから構成されている。N保育所は、これまで地元の私立大学の保育者養成担当教員らで園内研修プログラムを企画し、毎年実施している。このたびは関係者より研修講師の話をいただき、研修を行うことになった。6月7日（金）と11月22日（金）の2度にわたり、「子どもの成長と遊び」というテーマで研修を行うことになった。

Ⅳ. 園内研修プログラム

園内研修は以下の内容で実施された。

（1）第一回園内研修（2019年6月7日 13時30分から15時、於：N保育所大保育室）

①「子どもの成長と遊びとは」（レジュメ配布）

第一部「理論編」

- ・遊びの歴史（古代から現代まで）
- ・遊びの変遷
- ・子どもは遊びの天才
 - ・保育者は子どもの遊びの支援者
 - ・遊びで成長する子ども

第二部「実践編」

（チームビルディング、アイスブレイキング）

第一回の園内研修は、講義（理論）を1時間、実践を30分という流れで行った。しかし参加した保育士がそれぞれの職務があったため、研修に入れ替わり立ち代わりといった感じで進められた。理論編よりもむしろ実践編の内容を期待していた保育士が多く、講師であった執筆者も研修終了後、若手保育士は、各担当の職務に戻るようになったため、全員での反省会は実現することはなかったが、園長の同席のもと、執筆者と2人での反省会となった。若手保育者の研修後の感想をいただきましたが、後日園長先生からいただけるということを約束した。

また若手保育士ら参加（全員で14名）が多いため、「チームビルディング」や「アイスブレイキング」（負けじゃんけん、他已紹介、回文、指を使ったゲーム＜キャッチ＞など）で盛り上がりを見せた。研修には園長、主任といったベテラン保育士の方とともに受講したこともあり、やや全体の研修を通して緊張感はあったが、実践編から徐々に緊張感が支配するような雰囲気から解放された。

時間が短時間であることや、業務をしながらの研修であったため、パタパタが続いた。研修に参加した数名の保育士から研修を受ける意味はあったという回答をいただいた。

（2）第二回園内研修

② 2019年11月22日（金）13時30分から15時、於：N保育所大保育室）

「子どもの成長と遊びとは」（レジュメ配布）

第一部「理論編」（30分）

- ・乳幼児の成長段階と遊び
- ・子どもの規則正しい生活と体力向上
- ・子どもの遊びの問題（「三問」など）
- ・伝承遊びと自然遊び

第二部「実践編」（1時間）

（遊び紹介プリント配布）

- ・アイスブレイキング
- ・手遊び
- ・2人遊びから全員遊びへ
- ・家庭でもできるちょっと遊び
- ・質疑応答

第二回の園内研修は、理論編を30分、実践編を1時間と時間配分を変更し、若手保育士らが積極的に取り組めるような工夫を施した。また参加者が前回よりやや少ないこともあり（8名程度）、保育士の方の取り組みの様子をみながら随時実施した。理論編の内容も「子どもの遊び」に関連する内容に限定したため、受講する保育士の方々の反応も良く、遊びに関する基本的な質問も飛び出すことになった。

また「実践編」で「遊び紹介プリント（全20種）」を配布しながら、取り組んだことが効果があり、参加した保育士らがその遊びを応用してできるようにするため、学習材学習材料になったという研修後に若手保育士数名から声をいただいた。「あっちむいてホイ！」をはじめ「上がり目下がり目」、「こぶたぬきつねこ」、「グーチョキパーでなにつくろう」、「キャッチ」、「だるまさんがころんだ」、「猛獣狩りゲーム」など、若手保育者が知っているものを取り入れながら、実践していただいた。

研修直前に園長からも「知っている遊び」をするだけではなく、一つの遊びからあらゆるバリエーションをもたらすことができる保育士に育ってほしい、ということも話されていたので、いろいろなバリエーションを考えてもらう機会になればと考え臨んだ。

参加した保育士からは笑顔がこぼれていたことを今でも記憶している。研修終了後も保育士はそれぞれの職務に戻るようになるので、じっくり話を聞くことはかなわなかった

が、充実した研修になったのではないかと感じている。

V. おわりに一園内研修実施後の気づきと課題一

以上のことから、園内研修実施後の気づきについてまとめておきたい。

一点目は、若手保育士は、「遊び」のレパートリーが少なく、研修で遊びを習得することが大きな意味があったということである。養成校での学生時代には個々に遊びを習得し、ボランティアや実習に臨んでいたと思われるが、意外と知っていないことがわかった。そのため部分保育などを行うときにも「どのような遊びをすべきか」、「どんな遊びが子どもらの年齢にあっているのか」

などに不安や悩みを持っている保育士も少なくないことから、遊びをテーマにした園内研修の有効性が感じられた。研修を受講した若手保育士の方々は、園児に自信をもって手遊びをはじめ、楽しく取り組んでいたという報告を受けている。

二点目に1回だけでなく、2回同じテーマで研修を実施したことである。執筆者側の問題もあるが、参加した保育士の特徴を事前にしっかり把握していなかったこともあり、講師自身が描いた流れで研修を行うことになった。しかし、保育士にはなかなか難しく感じていたようであり、その反省をいかし、2回目の研修を実施した。研修時間の確保が難しい状況のなかであったが、2度実施することで研修内容に厚みをもたらすことができた。

今後は現場保育士の方々の成長に直接資するような園内研修を計画し、実施していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 村上文「保育園における園内研修の実践と課題—静岡県内の調査より—」（『常葉大学保育学部紀要』第2号、2015年、79～80ページ）。
- 2) 同上、81ページ。
- 3) 同上、82ページ。

参考文献

- (1) 秋田喜代美・松山益代『参加型園内研修のすすめ—学び合いの「場づくり」—』(ぎょうせい、2011年)。
- (2) 中坪史典編『保育を語り合う「協働型」園内研修のすすめ—組織の活性化と専門性の向上に向けて—』(中央法規出版、2018年)。
- (3) 中坪史典編『質的アプローチで拓く「協働型」園内研修をデザインする—保育者が育ちあうツールとしてのKJ法とTEM—』(ミネルヴァ書房、2018年)。
- (4) 伊勢慎・中坪史典・境愛一郎・保木井啓史・濱名潔「KJ法を用いた園内研修において保育者はどのような振る舞いをしているのか」(『幼年教育年報』第38巻、2016年)。
- (5) 森上史朗「カンファレンスによって保育をひらく」(『発達』第68巻、ミネルヴァ書房、1996年)。
- (6) 田中知歳「遊びきる子どもをめざして—子どもが意欲的に遊ぶための保育者の配慮とは—」(鳥取県教育委員会「鳥取県幼保小連携カリキュラム」より抜粋)。
- (7) 高山静子『環境構成の理論と実践—保育士の専門性について—』エイデル研究所、2014年。
- (8) 今井和子・近藤幹生監修『ミネルヴァ保育士等キャリアアップ研修テキスト1』(ミネルヴァ書房、2019年)。
- (9) 柳晋・星野真由美・栗山宣夫「保育者の困り感と研修内容の要望についてⅡ—幼稚園免許状更新講習受講者へのアンケート調査の分析—」(『育成短期大学幼児教育研究所紀要』第16号、2018年)。
- (10) 橋川喜美代「保育記録による園内研修と保育への振り返り—選抜研修がもたらす保育者の変容と園内への学びの広がり」(『兵庫教育大学研究紀要』第49巻、2016年)。
- (11) 佐木彩水「＜保育の現場から＞保育者の模索を支える—園内研修の様子の一つから—」(『幼児の教育』第109号、日本幼稚園協会、2010年)。
- (12) 守巧・山崎摂史・駒井美智子・栗原久「保育現場から大学に対する研修会開催に関する要望—公立保育所の保育士を対象としたアンケート調査の分析—」(『東京福祉大学・大学院紀要』第3巻第1号、2013年)。
- (13) 山本睦・坂井敬子「保育士の研修効果に影響する諸要因の検討」(『常葉大学保育学部紀要』第2号、2015年)。
- (14) 成田朋子「保育所保育指針の改定と保育士の園内研修へのとりくみについて」(名古屋柳城短期大学『研究紀要』(第30巻、2008年)。

